

平成20年 8 月 8 日
 水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（第2回）の意見

平成20年産水稻の8月15日現在における作柄概況調査に当たっては、以下の点に留意する必要がある。

- 1 水稻の生育は、5月から6月にかけて低温傾向に推移したことから初期生育は抑制されたものの、関東以西では7月以降、高温・多照に推移したことから、生育は回復し、平年並みに推移していると見込まれる。
 一方、北日本では7月が高温傾向ではあるものの、日照不足に推移したことから、今後の穂数、もみ数、登熟等への影響について留意するほか、倒伏や病害虫に留意する必要がある。
- 2 8月以降も、関東以西を中心に高温が続き、日照時間も平年並みかやや多いと予報されており、大きな減収要因は今のところ少ないとみられるが、台風などの天候次第では、作柄に大きな影響を及ぼす可能性もあることから、今後の気象の推移を注視する必要がある。
- 3 7月以降の高温により、斑点米カメムシ類の注意報も出されており、その被害の状況に留意するほか、北日本では7月の日照不足や今後の気象状況による、いもち病の発生に留意する必要がある。
- 4 7月以降、気温が高い日が続いていることから、出穂期から登熟期にかけての高温による品質への影響について留意する必要がある。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

(座長)	畑 中 孝 晴	社団法人農林水産先端技術産業振興センター顧問
	秋 田 重 誠	公立大学法人滋賀県立大学名誉教授
	黒 田 栄 喜	国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
	丸 山 幸 夫	国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
	近 藤 始 彦	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長
	長谷川 利 弘	独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員
	諸 岡 浩 子	気象庁地球環境・海洋部気候情報課調査官
	米 本 博 一	全国農業協同組合連合会常務理事
	築地原 優 二	全国農業協同組合中央会農業対策部長
	安 藤 勲	全国米穀販売事業共済協同組合常務理事

平成20年 8 月 27 日
水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（第 3 回）の意見

1 8 月 15 日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 7 月から 8 月上旬にかけて、東日本及び西日本では高温・多照で推移したが、北日本では 7 月に入り寡照傾向で推移し、8 月に入り一旦回復したものの、中旬以降は、低温傾向となった。

今後の天候の見通しでは、東日本及び西日本では気温は平年並みか高い見込みであるが、北日本では、8 月下旬は低い見込みであり、その後は平年並みか高いと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、初期生育はやや抑制され、穂数は平年並みからやや少なくなっているが、その後生育は回復し、もみ数は平年並みからやや多くなっている。

上記のような気象の推移・予報からすると登熟は、倒伏などの大きな障害がなければ、おおむね平年並みに推移すると見込まれる。

2 次期の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 北日本における 8 月中旬以降の低温・日照不足が登熟に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 東日本及び西日本では、高温による乳白米や斑点米カメムシ等による品質への影響に留意する必要がある。
- (3) 今後の台風や前線に伴う集中豪雨等が登熟に及ぼす影響に留意する必要がある。

3 次期のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻は、5 月から 6 月の低温・日照不足により生育が抑制されたものの、7 月以降、高温・多照に推移し、出穂は平年並みないしやや早くなっていることから、次期の調査は 9 月 15 日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

(座長) 畑 中 孝 晴	社団法人農林水産先端技術産業振興センター顧問
秋 田 重 誠	公立大学法人滋賀県立大学名誉教授
黒 田 栄 喜	国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
丸 山 幸 夫	国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
近 藤 始 彦	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長
長谷川 利 拡	独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員
諸 岡 浩 子	気象庁地球環境・海洋部気候情報課調査官
米 本 博 一	全国農業協同組合連合会常務理事
築地原 優 二	全国農業協同組合中央会農業対策部長
安 藤 勲	全国米穀販売事業共済協同組合常務理事

平成20年 9 月 26 日
水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（第 4 回）の意見

1 9 月 15 日調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

(1) 北日本を中心に 8 月中下旬に低温・日照不足となったものの、9 月に入ってから全国的に天候は回復し、高温・多照に推移している。

一方、9 月 18 日から 20 日にかけては台風第 13 号が日本付近を通過し、九州南部から太平洋沿岸の各地に大雨をもたらした。

今後の天候の見通し（9 月 19 日発表の気象庁 1 か月予報）では、全国的に気温は引き続き平年より高く、降水量は平年よりやや少なく、日照時間は平年よりやや多いと予想されている。

(2) このような気象の予報からすると、登熟については、おおむね順調に推移するものと見込まれるが、8 月中下旬に低温・日照不足となった地域における登熟への影響や、登熟期の高温による胴割米や腹白米、カメムシ被害による斑点米の発生による米の品質低下が懸念される。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

次回（10 月 15 日現在）の調査に当たっては、以下の事項が収量に及ぼす影響を適切に反映する必要がある。

(1) 8 月中下旬の低温・日照不足が作柄や品質に及ぼす影響

(2) 登熟期の高温や斑点米カメムシによる品質への影響

(3) 台風第 13 号の風水害による倒伏や作柄・品質への影響

(4) 今後の台風が作柄・品質に及ぼす影響

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

（座長）畑 中 孝 晴 社団法人農林水産先端技術産業振興センター顧問

秋 田 重 誠 公立大学法人滋賀県立大学名誉教授

黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授

丸 山 幸 夫 国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授

近 藤 始 彦 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長

長谷川 利 拡 独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員

諸 岡 浩 子 気象庁地球環境・海洋部気候情報課調査官

米 本 博 一 全国農業協同組合連合会常務理事

築地原 優 二 全国農業協同組合中央会農業対策部長

安 藤 勲 全国米穀販売事業共済協同組合常務理事